

穿孔具？それともロクロ具？

藤田富士夫

1. はじめに

弥生時代の石器に、「大型礫錐^{れきすい}」と称されるものがある。大型の長手の自然礫を磨き面取りして整えたものの一端あるいは両端を錐部としたものである（蜂屋 1985）。大阪府池上・四ツ池遺跡から 8 点が出土している。

これと同形態の石器が、香港やマカオといった南シナ海域の遺跡から出土している。1998 年 11 月に香港中文大学の鄧聡教授のご案内でマカオ博物館を訪ねた際、展示品の「環砥石^{かんといし}」（写真）を御一緒した和洋女子大学の寺村光晴名誉教授とともに観察する機会を得た。鄧教授は、マカオ黒沙遺跡^{ハクサ}（鄧 1996）で発掘された類品を水晶製の玦飾などの内孔を磨く「環砥石」と見ておられて、これまで中国各地での類品の集成を行っておられる（第 2 図）。この用途について、寺村先生は、確証はないが形状からして「ロクロ」のようなものではないだろうかと言われた。あわせて弥生時代の穿孔具の中に類例があると指摘された。

その後、鄧教授は『珠海文物集萃』（2000 年）を著わして、中国のロクロ技術を総説された。その中で、「今では、環珠江口地区で出土の乳凸状の石器は、ロクロの可能性もある。環珠江口地区のロクロは環玦飾の工房跡で常に発見される器物である。」とし、ロクロ具説を具体化された。

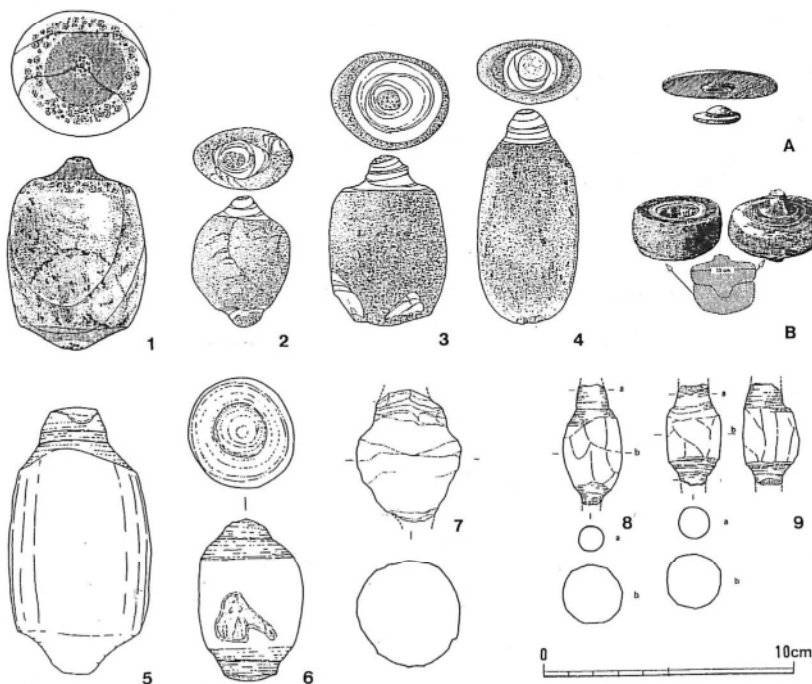
ここでは、日本の「大型礫錐」と、鄧教授が注目される「ロクロ具」研究の現状を概観する。

2. 大型礫錐の穿孔具説

「大型礫錐」は、大阪府の池上遺跡で「環状石斧用穿孔具」として報告されている（石神 1979）。そこでは 8 点が出土している。和泉砂岩などの棒状および円礫を素材としていて、長軸の一端もしくは両端に条線回転痕を有する凸部を有する。本遺跡では、未成品 2 点を含む計 8 点の環状石斧が出土しており、凸部径と石斧内径が合致することから環状石斧用穿孔具と見られている。

また、福岡県の石崎曲り田遺跡でも同種の石器が住居跡などから計 8 点出土しており（中間 1984）、中間研志氏は当該品を穿孔具として、「磨製穿孔具集成」を行い（中間 1985）、1 類＝先端

が段をなし細くなる小型類の定型化したもの、2 類＝全体が自然石の棒状品を用いた大型品で回転磨痕もかなり径の大きい部位まで残るもの、3 類＝小型細形で定型化しないが、弥生前期後葉～中期初頭というやや遅れた時期に残る類、に三分類している。「1・3 類は小径の石製穂摘具などの穿孔に、2 類は小径も穿孔に使用された可能性も有するものもあるが、大旨環状石斧等の穿孔に使用されたと考えられる」と用途に触れ、「環状石斧等の穿孔具」



第 1 図 ロクロ具・穿孔具実測図（参考文献から引用作成）
 (1 マカオ黒沙, 2~4 珠海鎖匙湾, 5 大阪四ツ池, 6 大阪池上, 7~9 福岡曲り田, A イタリア Somaliland 木製製陶転盤, B Fericho 石製製陶輪盤)

とされる池上・四ツ池遺跡例や、九州第2類は、いずれも九州第1類よりも時期的な後出性がみられ、環状石斧そのものの弥生期出現状況と一致するようである」としている。そして九州のそれを石製穂摘具などの石製品への穿孔具としている。

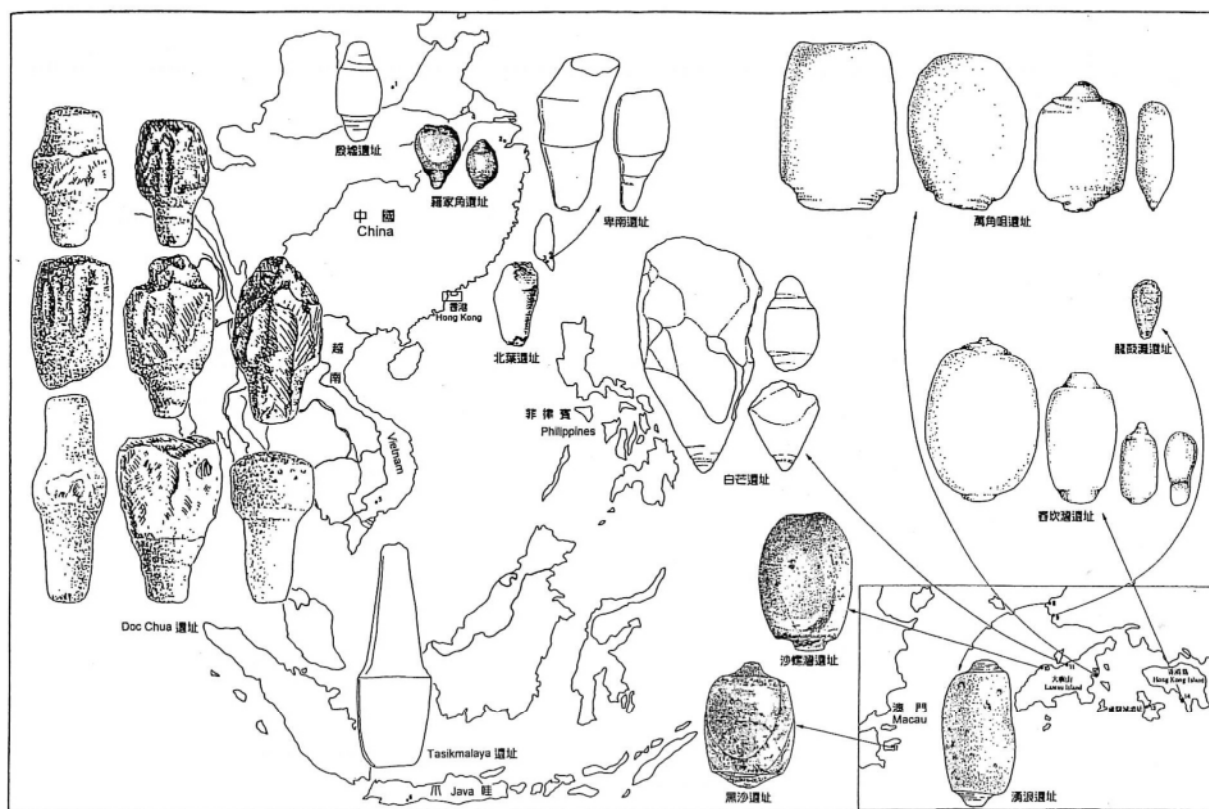
とりわけ2類のうちでも、いわゆる大型礫錐に限れば、福岡県の石崎曲り田遺跡、大阪府の池上遺跡、同四ツ池遺跡から出土しているにすぎない。石崎曲り田遺跡は弥生早期の夜臼式住居跡から出土しており、池上・四ツ池遺跡は弥生中期の第Ⅲ・Ⅳ様式に伴っているようである。

中間氏は、中国や韓国での穿孔具にも注目し、韓国大心里遺跡での大型品について、「環状石斧穿孔工具として最適の類である」としている。中国の西乾溝遺跡例は、「報告写真によると長さ8cm強で、両端使用の池上・四ツ池例に類似するものである。」と述べている。

3. 鄧教授によるロクロ具説

ロクロ具説は、前述したように寺村光晴先生により着目され鄧聡教授によって具体化された。鄧教授は当該石器の詳細な観察を行い、乳首凸は敲打で整形された後、回転運動によって光沢圏が形成されたものとした。あわせて南シナ海域では、香港の龍鼓灘・白芒・湧浪・東湾遺跡、マカオの黒沙遺跡、珠海の寶鏡湾・鎖匙湾遺跡などでも「乳首凸轆轤」石器が出土しており(第2図)、いずれも環状飾の製作遺跡であることや、小林行雄氏の碧玉材攻玉に伴うロクロ使用研究(『古代の技術』塙書房 1982 年)、中口裕氏のロクロを用いた石製品への穿孔実験(『実験考古学』雄山閣 1975 年)、チャイルドの“Rotary Motion” *A History of Technology*, Vol. 1, 1958 に記載されているイタリア Somaliland の木製製陶回転盤(第1図A)や Fericho 石製製陶輪盤(第1図B)の軸受けの形態などを援用してロクロ具説を提言している。

鄧氏は、約 6,000 年前の浙江羅家角遺跡や仰韶文化成都西乾溝遺跡で出土している類似品もロクロ具の可能性があるとしている。



第2図 東アジア地域の環砥石（ロクロ具）分布図（鄧・鄭 1996 より転載）

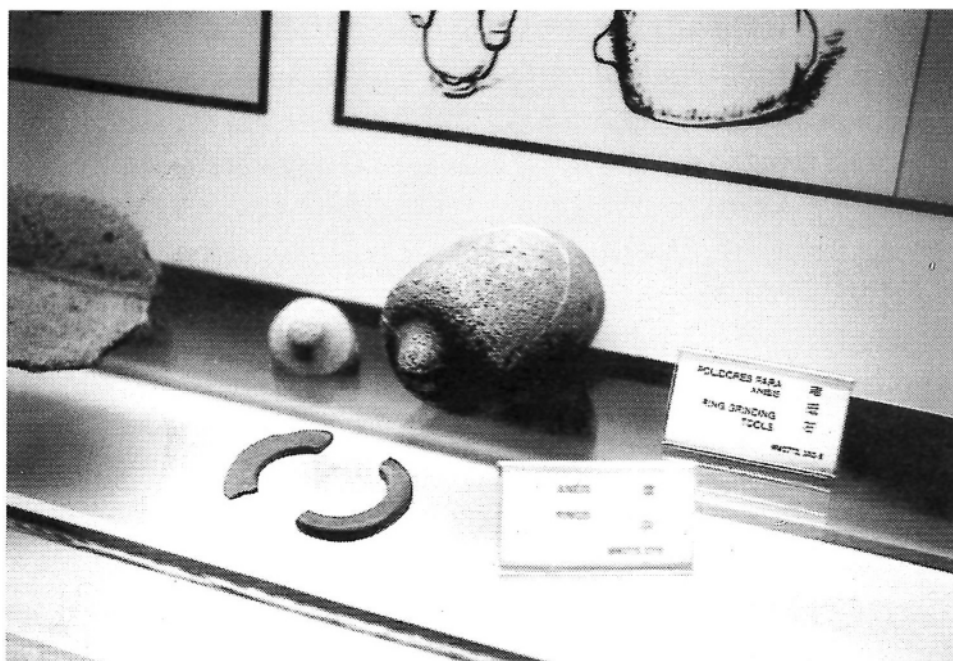
4. おわりに

第1図に、南シナ海域と池上・四ツ池遺跡および石崎曲り田遺跡の類似品を掲載した。それらは形態や大きさも酷似している。南シナ海域のこれらの遺跡群は、約4,000年前の新石器時代晩期に比定されている。一方、弥生早期や中期は約2,400～2,000年前頃とされている。

中間氏は、「磨製穿孔具はまさに曲り田期以降の、言わば弥生的遺物として、縄文的様相と切り離し得る全く新しい要素を有する文化的遺物、と位置づけられる」とし、「明確な海外からの頭初期水田稲作文化に伴う、数少ない確実な文化要素である」(中間1985年)としている。この指摘は示唆的である。日本列島の当該品が弥生遺跡一般に普遍的でなく、福岡県と大阪府の拠点遺跡でのみ検出されている現状からは、渡来的であるが限定的普及にとどまっているように思われる。

渡来のルートについては、中国大陸や半島からが想定されてきたが、南シナ海域に酷似する遺物が存在することから、彼地への注視は欠かせないものとなろう。当該品が、大きく南シナ海域との文化伝播によるものとすれば今日以上に重要な資料となる。

ただし彼我の間に横たわる大きな年代の違いやロクロ具説から列島の「大型礫錐」の見直しが可能かどうか、あるいは「他人の空似」かの問題については今後の研究の進展に期待したい。ここに鄧聡先生のご研究の一端を紹介するとともに日頃の学恩にお礼を申しあげる次第である。



マカオ博物館展示の黒沙遺跡出土の環砥石と環玦飾(手前)

引用・参考文献

- 石神幸子 1979 「環状石斧用穿孔具」『池上遺跡 第3分冊の1 石器編』 財団法人大阪文化財センター
- 中間研志 1984 「穿孔具」『石崎曲り田遺跡－II－中巻』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
- 中間研志 1985 「磨製穿孔具集成」『石崎曲り田遺跡－III－』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集 福岡県教育委員会
- 蜂屋晴美 1985 「石錐」『弥生文化の研究 第5巻』 雄山閣出版
- 鄧聡・鄭煒明 1996 『澳門黒沙』 澳門基金会・中文大学出版社
- 李世源・鄧聡主編 2000 『珠海文物集萃』 香港中文大学中国考古芸術研究中心